

御所伝受と古今伝受後奉納和歌

小 高 道 子

一 古今伝受の道統

「古今伝受」について、『図書寮典籍解題 続文学篇』^{〔1〕}（養徳社 1950 以下『続文学篇』と略す）は次の
やうにいづ。

いふが如く古今伝受は師から古今集についての講釈解読をつけつぐ伝承形式である。随つて授ける相伝と受ける伝受との二要素が必ず存し、この両者は明かに区別せられた。（中略）

古今伝受は普通、東常縁にはじまると謂はれる。しかしこの命題は常縁以来、これに対する世人の関心がたかまり、盛行しはじめた喧伝されたと言ひかへるべきであろう。古今伝受は常縁から宗祇に伝つた常縁に於

て在来の切紙口伝の秘説には一応の形式的整備がなされ、宗祇によって一層の潤色が加へられ、一条兼良、吉田兼俱等からうけた神道的儒教的色彩はより強く表面化したと考へられる。(中略) 後世いはれる如き不純なものではなかつたらう。

常縁から宗祇に伝えられた古今伝受は、宗祇から三条西実隆・近衛尚通・肖柏などに伝えられ、それぞれ他流と交流する事なく継承されていった。この中で「門弟随一」として宗祇の古今伝受を継承したのが三条西実隆であつた。その道統は三条西家で系図通りに継承されたが、実枝とその子公国との年齢が離れていたため、実枝は細川幽斎に古今伝受を預けた。幽斎は実枝の指示に従つて公国に古今伝受を返したが、公国が早逝したため幽斎は再び三条西家の古今伝受を継承する唯一の継承者となり、後陽成天皇の弟にあたる智仁親王に古今伝受を伝え⁽²⁾た。その後、智仁親王が在位中の後水尾天皇に相伝した事から古今伝受は御所に入る。いわゆる御所伝受である。⁽³⁾

一 御所伝受と後水尾院宮廷歌壇

寛永二年に智仁親王から後水尾天皇に古今伝受が相伝されると、古今伝受は御所において継承される事になる。後水尾院は宮廷歌壇の指導者となり、後西院の他、烏丸資慶・中院通茂・日野弘資の三人にも同時に古今伝受を伝えた。それまでは門弟を選んで伝えられていた古今伝受が、四人同時に相伝されたのである。また、後水尾院が指導者となる事により、それまで門弟を選んで器の水を器に移すように相伝された古今伝受が、古今伝受継承者のみならず、古今伝受を受ける事のない歌人も、後水尾院の指導を受けることになった。御所に入り後水尾院

が歌壇の指導者になる事によって、一子相伝から歌壇全体の指導へと、古今伝受継承者のあり方も、歌壇のあり方も変化したのである。

こうした後水尾院宮廷歌壇のあり方について、柳瀬万里氏は、『新明題和歌集』、『新題林和歌集』に収められた歌の数を歌人別に集計し、それぞれ五〇首以上を収められている歌人一九人、同一〇〇首以上一九人の名前を挙げ、整理された⁴。そして「近世前期に堂上歌壇というものが存在しているとするとするならば、左に記すような形態が推定できる」として、歌人を「(1) 後水尾院(中心) / (2) 後水尾院の側近——古今伝受授グループ——(略) / (3) 準古今伝授グループ(略) / (4) (3)の外縁部に位置する歌人たち 阿野実顕、三条西実教、柳原資行、園基福、下冷泉為景たち」に分けて概観された。そしてこれらの歌人を円錐形に位置つけた。

右の形態を鳥瞰図で描くならば、円錐形の山の頂上に(1)があり、(1)の周辺に(2)があり、(2)の周辺に(3)があり、(3)の周辺、裾野のあたりに(4)がある、という形態として描かれるであろう。

それまで門弟を選んで継承者にのみ相伝していた三条西家の古今伝受が、御所に入る事により、古今伝受継承者以外の宮廷歌人も、古今伝受継承者とともに後水尾院の指導を受ける事になった。ここにおいて、歌壇と古今伝受のあり方は大きく変わったといえよう。

三 古今伝受後奉納和歌

柳瀬氏は撰集を用いて後水尾院歌壇の宮廷歌人を概観したが、撰集を用いる事により、中院通勝など既に故人となった歌人も挙げている。ここで想起されるのが古今伝受後奉納和歌である。御所伝受において古今伝受が継

承されると、古今伝受を伝受した歌人のみならず、歌壇の歌人が揃って和歌を奉納している。それまで古今伝受の前提として行われてきた師弟間における和歌指導が、歌壇を構成する歌人による奉納和歌、という形で行われるようになったのである。古今伝受後奉納和歌については、鶴崎裕雄氏を中心に翻刻・研究されている。⁵⁾

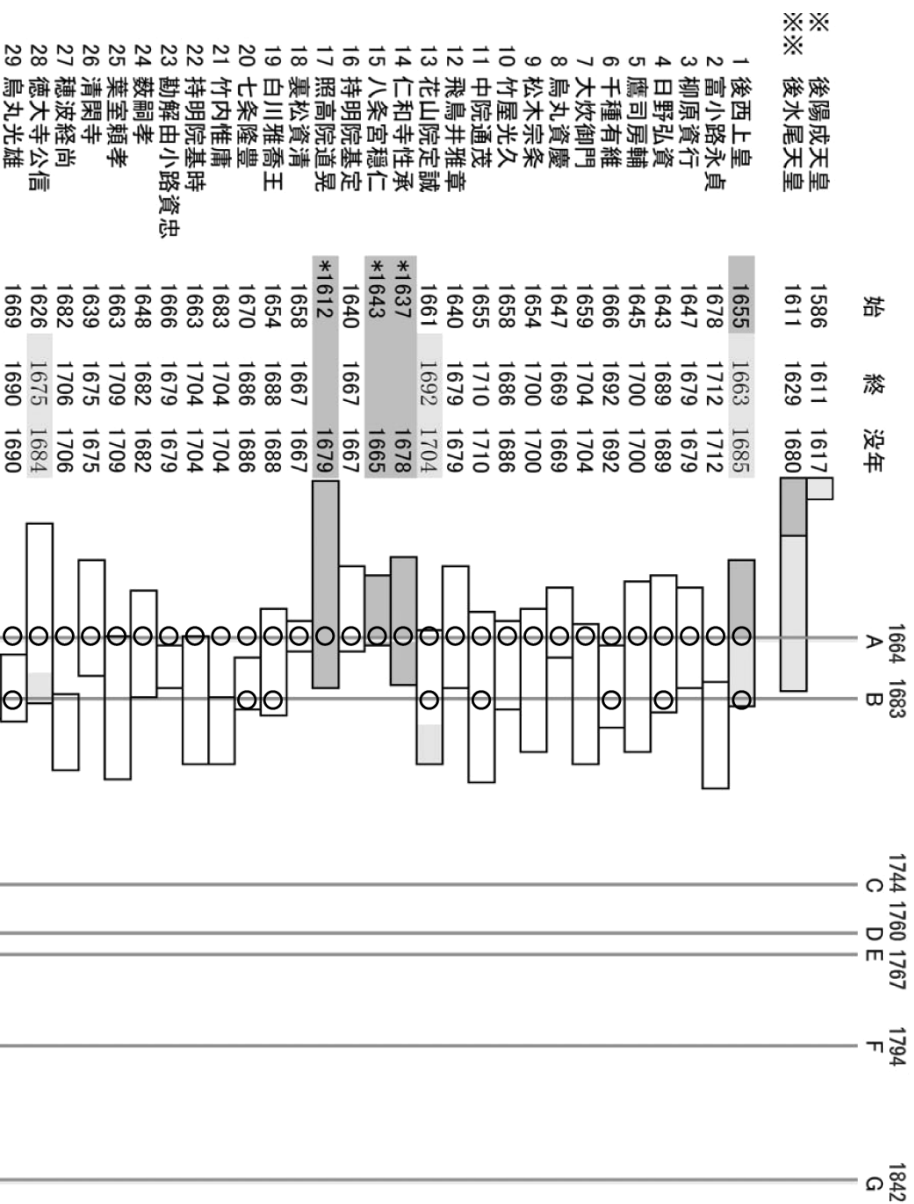
- A 寛文四年六月朔日御法楽（後水尾法皇 後西上皇他 後西上皇・八条宮穩仁親王・照高院道晃法親王）
 B 天和三年六月一日御法楽（後西上皇 靈元天皇 後西上皇・靈元天皇・有栖川宮幸仁親王）
 C 延享元年六月一日御法楽（烏丸光榮 桜町天皇・有栖川宮職仁親王 桜町天皇 閑院宮直仁親王・伏見貞建親王・京極宮家仁親王）
 D 宝暦十年三月廿四日御法楽（有栖川職仁親王 桃園天皇 有栖川職仁親王・桃園天皇・京極宮家仁親王・閑院宮典仁親王）
 E 明和四年三月十四日御法楽（有栖川職仁親王 後桜町天皇 後桜町天皇・有栖川職仁親王・有栖川織仁親王・京極宮家仁親王）
 F 寛政九年十一月廿六日御法楽（後桜町天皇 光格天皇 後桜町天皇・光格天皇・有栖川織仁親王・閑院宮美仁親王）
 G 天保十三年十二月十三日御法楽（光格上皇 仁孝天皇 仁孝天皇）

和歌を奉納するためには、歌壇の一員でなければならぬ。そのため奉納した歌人を整理する事により、それぞれの時代の宮廷歌人を概観する事ができるであろう。A～Gの御法楽において和歌を奉納した歌人については、

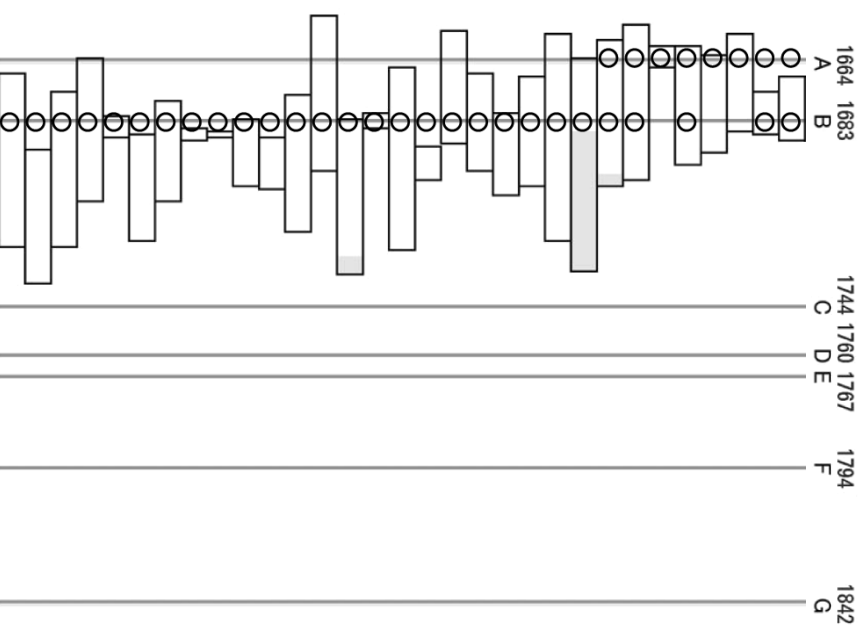
『紀州玉津島神社奉納和歌集』（注5）の末尾に、歌人名・家名・最終官位・『公卿補任』の記載年・奉納した歌の数が表にされている。

最後に、同書で紹介されている七回の古今伝受後奉納和歌について、奉納した歌人が皇位あるいは官位についていた時期を一覧する。後陽成天皇が退位し、後水尾天皇が即位した一六一一年から明治時代が始まる一八六八年までの期間について、左に歌人名を記し、皇位・官位についていた時期、没年を□□で示した。退位・出家などで退いた後は□□として、官位につかなかった親王などは□□とした。奉納和歌が奉納された年に縦線を引き、奉納した歌人に「」印を付した。なお、75以下130までに見られる無印の歌人は、古今伝受後奉納和歌ではなく、仙洞御所の奉納和歌を奉納している。

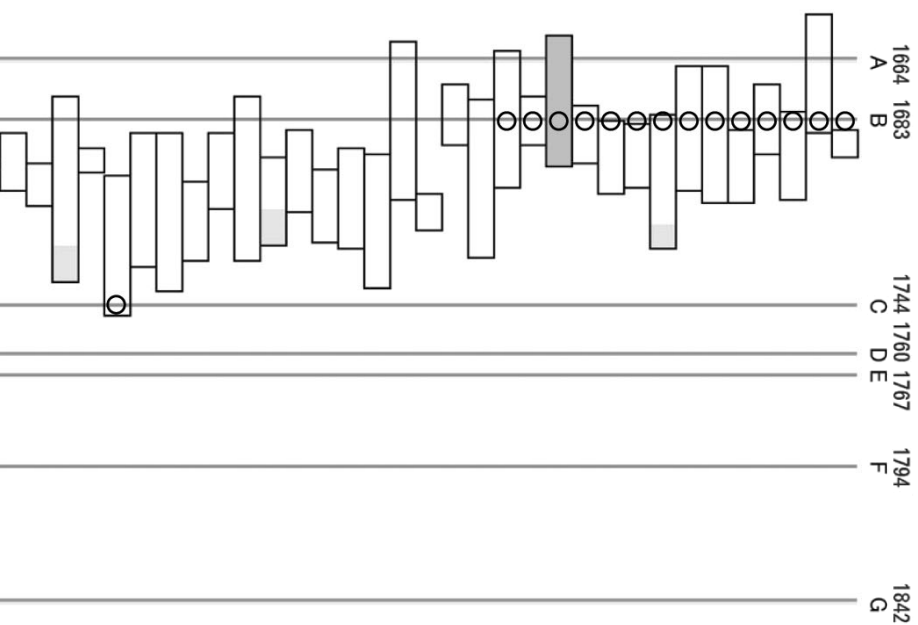
この表を一瞥すると、古今伝受後奉納和歌が奉納された間隔は、それぞれ大きく異なる事がわかる。またDとEは七年の間隔で奉納されているから、両方に奉納できる公家も多いが、必ずしも二回とも奉納しているとは限らない。それぞれの奉納和歌について奉納した歌人を検討する事により、歌壇のあり方を窺うことが出来るであろう。それぞれの奉納和歌と宮廷歌壇のあり方については、稿をを改めたい。



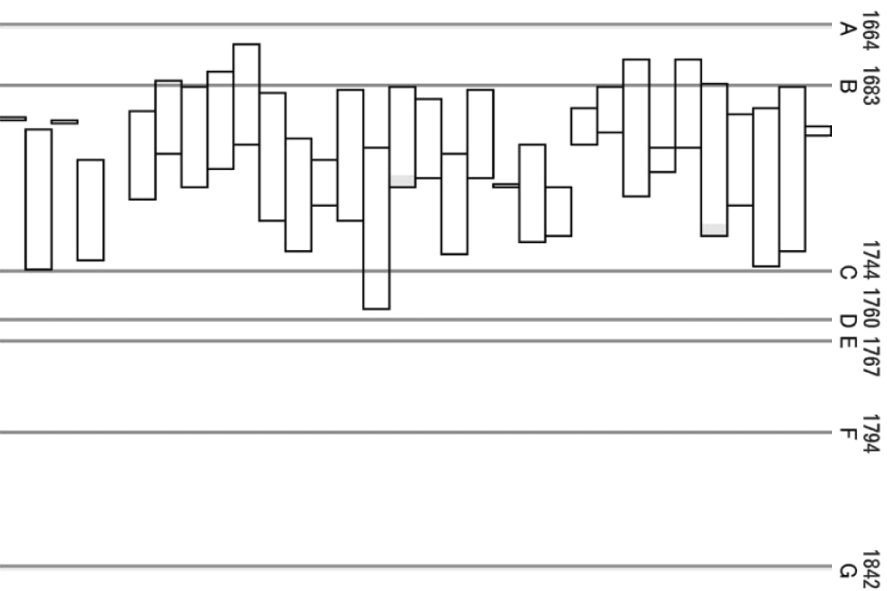
	始	終	没年
30	1669	1689	1689
31	1674	1687	1687
32	1655	1686	1686
33	1662	1693	1693
34	1689	1697	1697
35	1659	1665	1665
36	1652	1702	1702
37	1657	1701	1704
38	1663	1687	1732
39	1655	1722	1722
40	1669	1704	1704
41	1681	1707	1707
42	1668	1699	1699
43	1654	1690	1690
44	1692	1702	1702
45	1666	1725	1725
46	1681	1685	1685
47	1683	1728	1733
48	1649	1699	1699
49	1675	1719	1719
50	1689	1705	1705
51	1683	1704	1704
52	1687	1688	1688
53	1686	1689	1689
54	1677	1709	1709
55	1688	1722	1722
56	1682	1688	1688
57	1663	1709	1709
58	1674	1724	1724
59	1693	1736	1736
60	1668	1724	1724



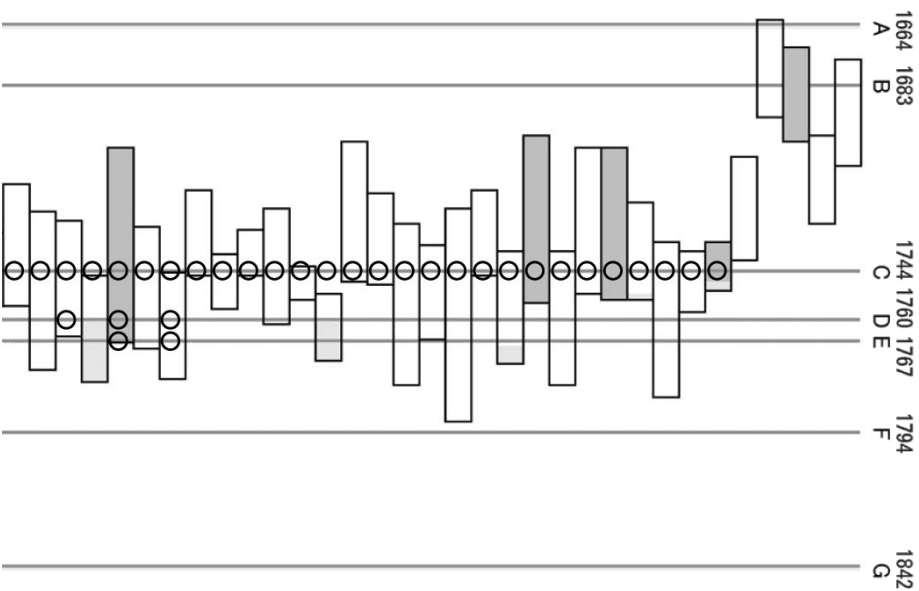
	始	終	没年
61 正親町三条実久	1687	1695	1695
62 千種有能業	1649	1686	1687
63 清水谷実業	1681	1709	1709
64 甘露寺方長	1672	1694	1694
65 平松時方	1687	1710	1710
66 風早実種	1666	1710	1710
67 河端実陳	1666	1706	1706
68 庭田重冬	1682	1718	1725
69 水無瀬兼豊	1685	1705	1705
70 清閑寺熙定	1684	1707	1707
71 醍醐冬基	1679	1697	1697
72 有栖川幸仁	*1656	1698	1698
73 梅園季保	1676	1691	1691
74 一冬冬経(兼輝)	1661	1705	1705
75 正親町公通	1677	1728	1728
76 烏丸宣定	*1672		1691
77 山井兼仍	1708	1719	1719
78 中御門資熙	1658	1709	1709
79 武者小路実陰	1695	1738	1738
80 竹屋光忠	1693	1725	1725
81 風早公前(公長)	1700	1723	1723
82 園基勝	1687	1713	1713
83 東久世博高	1696	1713	1724
84 九条輔実	1676	1729	1729
85 飛鳥井雅豊	1688	1712	1712
86 六条有慶(有藤)	1704	1729	1729
87 中院通躬	1688	1739	1739
88 吉田兼連(兼敬)	1688	1731	1731
89 久我通清(通夏)	1702	1747	1747
90 四辻公韶	1693	1700	1700
91 近衛家熙	1676	1725	1736
92 交野時香	1698	1711	1711
93 白川雅光	1688	1706	1706



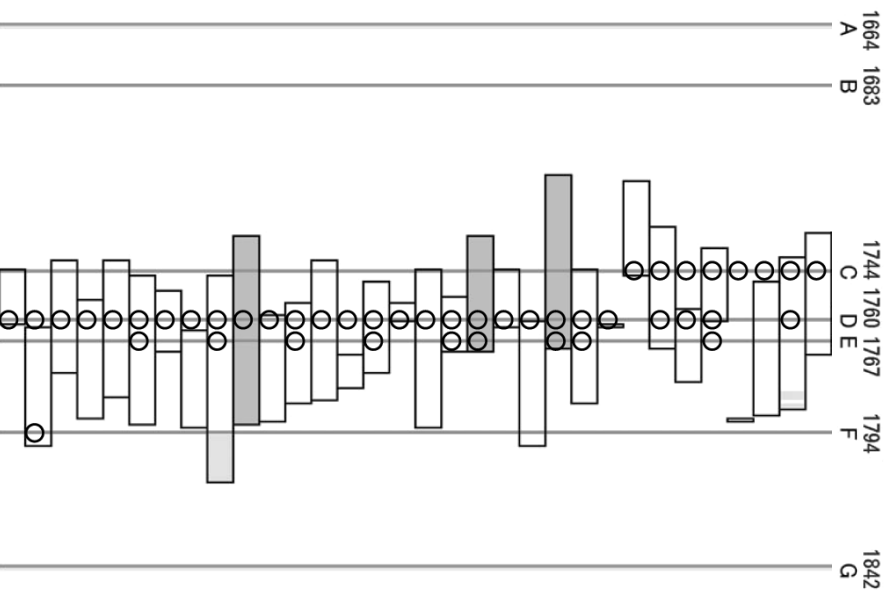
	始	終	没年
94 難波宗尚	1697	1699	1699
95 広幡豊忠	1684	1737	1737
96 綾小路為胤	1691	1742	1742
97 上冷泉為綱	1693	1722	1722
98 二条綱平	1683	1729	1732
99 山本実富	1675	1703	1703
100 野宮定基	1704	1711	1711
101 久我通誠	1675	1719	1719
102 鼓嗣章	1684	1698	1698
103 葉室頼重	1691	1702	1702
104 橋本実松	1717	1732	1732
105 石山基信(師香)	1703	1734	1734
106 入江相尚	1716	1716	1716
107 藤谷為茂(通晴)	1685	1713	1713
108 愛宕通統(通晴)	1706	1738	1738
109 石井行豊	1688	1713	1713
110 押小路公澄	1684	1713	1716
111 滋野井公澄	1704	1731	1756
112 藤波景忠	1685	1727	1727
113 芝山広重	1708	1722	1722
114 桑原長義	1701	1737	1737
115 梅小路共方	1686	1727	1727
116 高辻豊長	1670	1702	1702
117 東園基量	1679	1710	1710
118 中山篤親	1684	1716	1716
119 伏原宣幸	1682	1705	1705
120 四条隆安	1692	1720	1720
121 →105			
122 中御門官頭	1708	1740	1740
123 六角基維			1695
124 坊城俊清	1698	1743	1743
125 甘露寺輔長			1694



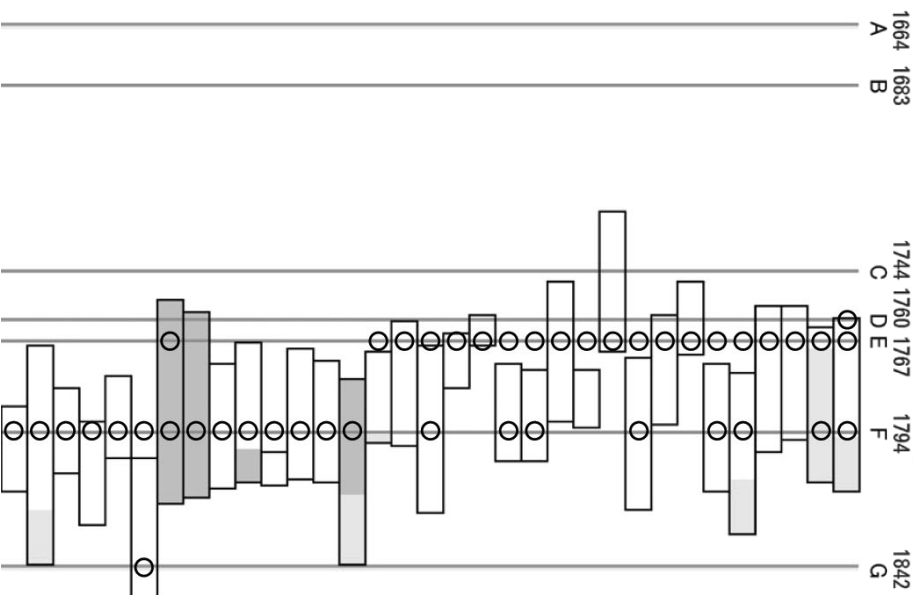
	始	終	没年
126 今出川伊季	1675	1709	1709
127 東園基長(基雅)	1700	1728	1728
128 勤修寺濟深	*1671	1701	1701
129 阿野為信	1662	1693	1693
130 藤谷為信	1707	1740	1740
131 桜町天皇	1735	1747	1750
132 藤谷為香	1738	1757	1757
133 近衛内前	1735	1785	1785
134 風早実積	1722	1752	1753
135 閑院宮直仁	*1704	1753	1753
136 一条兼香	1704	1751	1751
137 広橋兼胤(勝胤)	1738	1781	1781
138 伏見宮貞建	*1700	1754	1754
139 上冷西公福	1718	1745	1745
140 三条隆古	*1724	1793	1793
141 高野重豊	1736	1766	1766
142 芝山重豊	1729	1781	1781
143 醍醐兼潔(経胤)	1719	1748	1748
144 鳥丸光采	1702	1747	1747
145 久世通夏(通清)	1752	1760	1773
146 坊城俊逸	1743	1753	1753
147 中院通枝	1724	1761	1761
148 久我通兄	1731	1745	1745
149 高松重孝	1739	1756	1756
150 八条隆孝	1718	1745	1745
151 庭田重孝	1745	1779	1779
152 飛鳥井雅重	1730	1769	1769
153 一条道香仁	*1704	1767	1767
154 京極宮彥仁(光胤)	1746	1760	1780
155 鳥丸清胤(光胤)	1728	1765	1765
156 飛鳥井雅香	1725	1776	1776
157 葉室頼胤	1716	1755	1755
158 高倉永房	1716	1755	1755



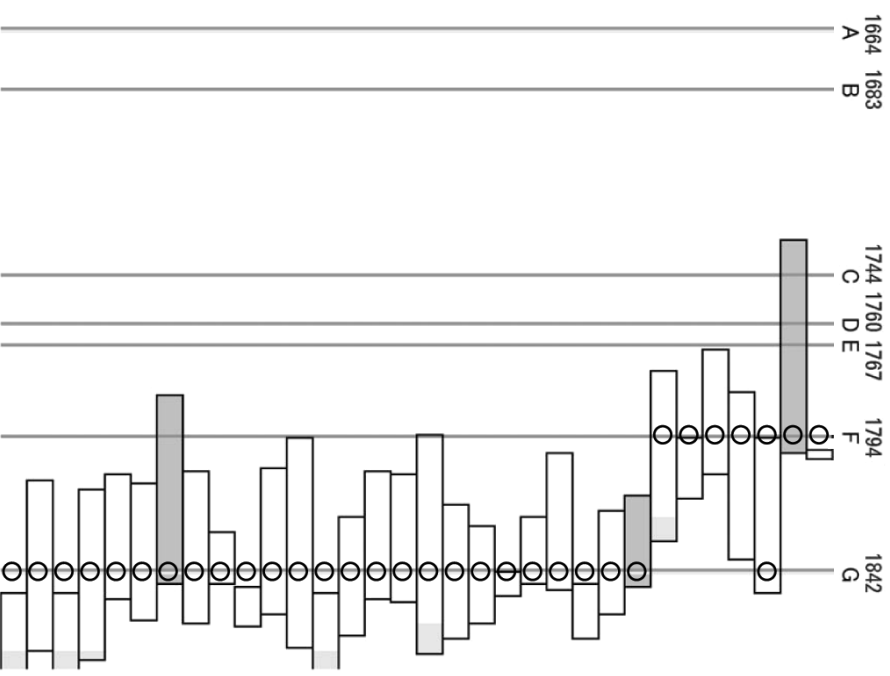
	始	終	没年
159 中山栄親	1732	1771	1771
160 中庭田重熙	1740	1784	1789
161 三条西実称	1748	1791	1791
162 西洞院明名			1793
163 柳原光綱	1737	1760	1760
164 久世栄通	1757	1780	1780
165 下冷泉宗家	1730	1769	1769
166 園基香	1715	1745	1745
167 桃園天皇			1762
168 九条尚美	1744	1787	1787
169 有栖川宮職仁	*1713		1769
170 万里小路韶房	1761	1801	1801
171 万辻盛仲	1744	1762	1762
172 京極宮公仁	*1733		1770
173 九条道前	1753	1770	1770
174 園池房季	1744	1795	1795
175 武者小路実岳	1755	1760	1760
176 石井行忠	1748	1777	1777
177 三室戸光村	1772	1782	1782
178 平松時行	1741	1786	1786
179 風早公雄	1755	1787	1787
180 大原重度	1759	1793	1793
181 閑院宮典仁	*1733		1794
182 鷹司輔平	1746	1797	1813
183 櫛笥隆望	1764	1795	1795
184 山科頼言	1750	1770	1770
185 莙荃頼要	1746	1794	1794
186 植松實雅	1741	1785	1785
187 石山基名	1754	1792	1792
188 姉小路公文	1741	1777	1777
189 日野資枝	1763	1801	1801
190 姉小路美茂	*1744		1761



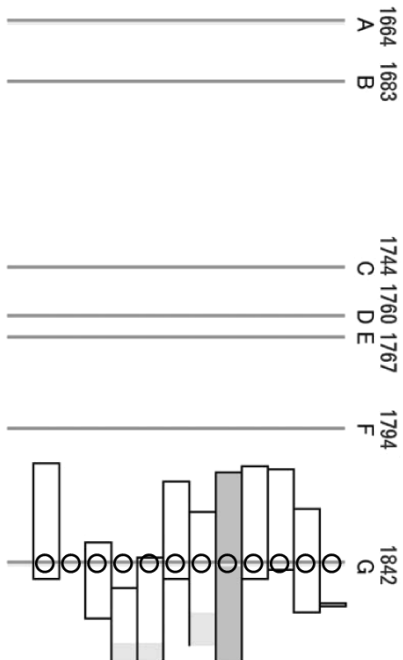
	始	終	没年
191	1760	1799	1816
192	1762	1770	1813
193	1756	1799	1799
194	1756	1803	1803
195	1778	1813	1830
196	1775	1816	1816
197	*1748		1771
198	1759	1794	1794
199	1773	1822	1822
200	1725	1770	1770
201	1777	1795	1795
202	1748	1793	1793
203	1777	1806	1806
204	1775	1806	1806
205	1759	1768	1768
206	1765	1782	1782
207	1768	1823	1823
208	1761	1801	1801
209	1771	1797	1800
210	1780	1817	1840
211	1774	1813	1813
212	1770	1812	1812
213	1804	1814	1814
214	1768	1803	1813
215	1775	1815	1815
216	*1758		1818
217	*1754		1820
218	1806	1851	1851
219	1779	1805	1805
220	1794	1827	1827
221	1783	1810	1810
222	1769	1823	1840
223	1789	1816	1816



	始	終	没年
224 葉室頼寿	1802	1804	1804
225 伏見宮邦頼	*1733	1802	1802
226 上冷泉為則	1798	1848	1848
227 一条忠良	1783	1837	1837
228 一豊尚貞	1769	1809	1809
229 正親町実光	1798	1817	1817
230 庭田重嗣	1776	1824	1831
231 仁孝天皇	1817	1846	1846
232 武者小路公隆	1822	1855	1855
233 烏丸光政	1846	1863	1863
234 一条斎信	1803	1847	1847
235 上冷泉為全	1824	1845	1845
236 藤谷為知	1842	1849	1849
237 葉室顯孝	1827	1858	1858
238 一条忠香	1820	1863	1863
239 鷹司政通	1797	1859	1868
240 高松公祐	1810	1851	1851
241 久我通理	1809	1850	1850
242 広橋光成	1824	1862	1862
243 飛鳥井雅典	1849	1868	1883
244 花山院家厚	1798	1866	1866
245 高倉永雅	1808	1855	1855
246 甘露寺愛長	1847	1859	1859
247 中園泰行	1829	1845	1845
248 安倍泰暉	1809	1858	1858
249 有栖川韶仁	*1784	1845	1845
250 広幡基豊	1813	1857	1857
251 園地実達	1810	1850	1850
252 綾小路有長	1815	1868	1876
253 正親町実徳	1849	1868	1891
254 山科言知	1812	1867	1867
255 上冷泉為理	1849	1868	1885



	始	終	没年
256 下冷泉為行	1824	1857	1855
257 飛鳥井雅久	1811	1843	1857
258 藤谷為脩	1810	1846	1843
259 日野資愛	1812	1846	1846
260 有栖川懌仁	*1812	1858	1886
261 八条隆祐	1825	1858	1872
262 中院通知	1815	1846	1846
263 中山忠能	1840	1868	1888
264 三条幸季	1850	1868	1880
265 九条幸経	1835	1859	1859
266 日野西延光	1809	1846	1846
267 坊城俊明	1819	1860	1860



注

- (1) 『図書寮典籍解題 続文学篇』(養徳社 昭25) なお、本稿は同書に負うところが大きい。
- (2) 返し伝受については「二つの返し伝受」(『梅花短大国語国文』平1・7) で検討を加えた。
- (3) 細川幽斎から智仁親王への古今伝受については「細川幽斎の古今伝受」(『国語と国文学』昭55・8) において検討を加えた。
- (4) 「後水尾院宮廷の歌人」(『国語国文』昭55・8)。
- (5) 鶴崎裕雄・佐貫新蔵・神道宗紀『紀州玉津島神社奉納和歌集』(平4)、鶴崎裕雄・神道宗紀『住吉大社奉納和歌』(平11)、神道宗紀『和歌三神奉納和歌の研究』(平27 和泉書院)。

付記

本稿をなすにあたって、鶴崎裕雄氏に御指導を賜った。また同氏の一連の奉納和歌研究に負うところが大きい。記して深謝申し上げる。また、本稿は、平成三十年六月九日に熱田神宮文化殿で開催された東海近世文学会六月例会における発表内容に加筆したものである。御教示を賜った各氏に記して深謝申し上げます。